

とき
メモ
時空を超えた手紙

AJBRC文庫



著・原 和規

イラスト・櫻井更紗

この電子書籍はコミックマーケット96で
頒布したものを電子書籍用に再構成したものです。

とき
時空を超えた手紙
メモ
AJBRC文庫

著・原 和規

あ 五 四 三 二 一 ま
 と 本 岩 何 化 さ え
 が 当 下 か 学 さ が
 き は さ ヒ 実 い き
 ん ン 験 な
 の ト 出
 家 に 来
 に な 事
 る
 物
 は

も
く
じ

・ ・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ ・

3 2 2 1 1
 0 6 1 5 1 5 3

まえがき

みなさま、いかがお過ごしでしょうか。

この度はA J B R C文庫『時空を超えた手紙』をお手に取っていただきまことにありがとうございます。今回の作品本当は昨年の夏に出す予定の物でした。

ですが間に合わず・・・ならばと次の冬に合わせようとしたのですが・・・今回やっとみなさんにこうしてお目にかけることが出来ました。

内容が内容ですので結果的には今こうしてこの時期に出せてよかったのではないかと思っています。

ちよつとテーマ的には重めのお話ですがそこは・・・作品自体は楽しんでいただきこれを引きつけに色々とみなさん一人一人が考えるきっかけになれば幸いです。

今回のお話もいつもながらぼくが夢で見た内容が元になっています。

この夢を見て起きた瞬間目から涙が出ていたのを覚えています。
そして思いました。これを忘れる夢ではなくキチンと形として残る夢にしないといけな
い。

そうでなければあの人の思いが消えてしまう。

今回のお話は色々な人の思いが詰まった作品だと思います。

では最後までお読みいただけたら幸いです。

1. ささいな出来事

一・ささいな出来事

きっかけは体育倉庫の壁の隙間で見つけた一枚のメモ書きでした。

それには何か文章のようなものが走り書きされているように見えるんだけどもう相当前の物らしくて古びてインクが赤茶けて読めなかった。

少なくとも私には読むことが出来なかった。

その時は特に気にも留めず制服のポケットに突っ込むと体育倉庫を後にした。

私はそのメモの事はすっかり忘れていたんですがある日、制服のポケットに手を突っ込むと『ガサツ』と言う音がして何かに手が当たった。

何だろうと思って取り出してみると体育倉庫で見つけたあの赤茶けたメモ書きが出て来た。

『うーん、やっぱり読めない。』

そう思いながら私が折り返したみ鞆にしまおうとしていると・・・

「よっこ！何見てるの？」

1. ささいな出来事

後ろの方から声がありました。その声の方を見ると友達の一之瀬杏子が立っていた。

「ああ、何だ。杏子か。うん、まあね・・・」

「ひよつとしてラブレター？」

「バカッ！そんなじゃないわよ。」と言って私は杏子にそのメモを見せた。

「えーと・・・ああ文章が書いてあるね。もしかしてよっこはなんて書いてあるのかわからないの？」

「えっ？杏子はこのメモ読めるの？」

「うん。だってこんなにはつきり書いてあるじゃない。」

「はつきりって・・・どこが？インクが古くなってて赤茶けてて全然読めないじゃない・・・まあ、いいわ。あつ、ねえ、ちよつといい？」

そうやって私はその場をたまたま通りかかった男子、だんし塔山君とうやまに声を掛けた。

1. ささいな出来事

「何？矢ヶ崎さん。ぼくに用？」

「ちよつとこのメモなんて書いてあるか読んでくれる？読めないよね。」

「どれどれ・・・ちよつと古いメモだけど何とか読めるね。」

「読めるの？」私が訪ねる。

「だって、これ普通に日本語で書いてあるもの。」

「本当！？あのね塔山君。杏子は何か文章が書いてあるって言ってるんだけど、私は全然読めないんだけど・・・」

「ほら『体練倉庫たいれんで午前十時に待つ。武雄』って書いてあるよ。」

「違うでしょ。塔山君。よっこ、このメモにはね『岩下様 当地でのみなさまの心のこもったおもてなし本当に感謝致しております。この御恩は一生忘れません。みなさまお元気でお過ごし下さい。昭和十九年六月十日 西脇武雄』って書いてあるでしょ。」

「いや。絶対『体練倉庫で午前十時に待つ。』だよ。」と塔山君がちよつとムキになりな

1. ささいな出来事

がら杏子に言う。

「ちょっと待って。じゃあ、塔山君と杏子は違うことが書いてあるっていうわけ？」

「え？」と塔山君が聞き返す。

「だって私は二人とも間違ったことを言うとは思えないの。だって杏子は家がお寺で靈感もあるっていうから普通の人に見えないことが見えるのかもしれないし……塔山君は……」

「ぼくには、靈感って多分ないと思うな。でも。」

「うん。それでも私は二人とも信じるよ。だって二人がそれぞれにそう読めたんだし。それに最後の名前の部分が『西脇武雄』さんと『武雄』さん。きっと塔山君の方は苗字がないけど同じ人だと思うからね。」

「なるほど。確かに言われてみればそうっぽいね。」と塔山君。

「よっこ。私ね、ちょっと引っかかかってるんだけど、私が見えてる方には『岩下様』って宛名が書いてあるけどどうして塔山君が見えてる方には宛名がないんだろう。」と杏子が聞いた。

1. ささいな出来事

「そうね。どうしてなのかな。」

「昭和十九年に書かれた手紙だからじゃない。」と塔山君。

「どういう事？」と私は聞き返す。

「うん。昭和十九年って確か、第二次世界大戦中だよ。あの頃ってストレートに物が書けなかった時代だったはずなんだ。だから片方には宛名があってもう片方には宛名がない。でもぼくは両方とも同じ岩下さんに宛てた手紙のような気がするんだ。」

「そうかもしれないね。」と私は言った。

「でも塔山君、ずいぶん詳しいね。」と杏子。

「ドラマや映画あの時代の様子が描かれているからひよっとしたらって思っただけなんだ。」

「ふーん。そうなんだ。」と杏子が言った。

「でもこれインクが赤茶けちゃってるけど何とかして読めないのかな。」と私が言うのと。

「うーんそうだね。ひよっとしたら化学の石塚先生に相談したら何とかして下さるんじゃない？」

1. ささいな出来事

ない？」と塔山君。

「塔山君頭いいわね。前にテレビでやってたけど古いインクでも薬品を使えば読めるようになるらしいからその手、使えるかもしれないね。」と私が言う。

「そうだね。そうすれば今なんて書いてあるかわかると思うし。」

と言う杏子の意見に私は「今って？」

「今は今だよ。」と言った。

私は釈然としなかったけど「まあ、まずは石塚先生に相談だね。」と言った。

ここまでお読みいただきありがとうございました。
もし気に入っていただけましたら続きは有料版を
お読みください。

作者